

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 4年 4月 15日(金)

通算219号

◇ 「あたりまえの生活習慣」の背景にあるもの

写真は、転任者の話を聞く退任式（4/11・月）での児童の様子。



音を捉える【耳】に加え、【目】でも話をきいているのが伝わってくる。立派な姿だ。子供たちは話を「聞」くのではなく、話を【聴】いていると表現してもよい。

大事な点がもう一つある。「体を話し手に向けていること」だ。

1年生はまだこれからだが、2年生以上は、演台に人が立てば指示がなくとも話を聴く体勢を自然にとることができる。彼らの【あたりまえ】になった証だ。

この体勢を「話し手に臍(へそ)を向ける」と呼んでいる。

「話し手の方を向く」では、児童らは首から上の角度を変える。「話し手に体に向ける」では、ほんのわずかに児童は体の向きを変える。ところが、「話し手の方にへそを向ける」となると、児童はぐいと体の向きを変える。前列両脇の青➡の児童の体の向きが明らかに他と異なるのは、児童の【意識=心】の表れ。そして最前列の児童は、最前列が最も重要であることも認識している。

【耳】 + 【目】 + 【心】 = 【聴】 …やはり、児童は【聴けている】のである。

写真の赤➡は教師。これまた児童に負けないくらい素晴らしい。

「耳」は壇上の転任者の話を、「目」で追うのは児童の姿。「心」は両方か。

児童の姿を見取り、児童を褒める「学級の時間の話」につなげてゆくのだろう。

もう一度「話し手に臍(へそ)を向ける」に話を戻そう。

集会や式は日常ではなく、非日常。それでも児童が「話し手に臍を向ける」意識をもち、教師も気にかけているのには理由がある。日常の学級経営だ。



上の写真は1年生の教室での授業風景。注目は「児童の机の向き」である。中央列は真っ直ぐに、両脇列は教師の方に角度をつけて向ける。つまり、自席に座った状態で、児童の誰もが教師に臍(へそ)を向けた状態に仕向けるのだ。これにより、児童は顔を上げるだけで教師の姿が飛び込んでくる。話もよく聞ける。机の向きを変える。これだけで学習効果が高まるといってもよい。

児童ばかりではない。教師にとっても大きなメリットがある。仕事の性質上、授業中の教師は教室のあらゆるところに視線と心を配る。ずっと行っているベテランは、若手に比べてかなり視野が広いが、それでも一見で子供の様子をつかむことは困難だ。けれども机の角度を変えるだけで、教師が動かす視線の幅は随分変わる。若手もベテランに近い視野で授業を進められるのだ。

そして何より、きらきらと輝く子供の視線が教師のやる気を倍加させる。教師をやる気にさせる最大のエネルギーは、【子供のやる気に満ちた瞳】なのだ。



日々の授業や学級での話はもちろんのこと、避難訓練や身体測定で指示を出す教師の声に張りが出るのもうなずける。

そして左写真は入学日の1年1組、教室での様子。学級のスタートから机の向きは教師の方へ。徹底している。拍手。

全学年同一歩調の取組は、今後も続く。